

# The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

## 判別できぬ祈り

### 作成レギュレーション

#### 基本概要

- ・ 経験点：157500 点
- ・ 資金：303000G
- ・ 名誉点：1900 点
- ・ 成長回数：298 回
- ・ マジテックトームストーン：戦記 2000 個、詩学 700 個
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク S 以上／防具ランク S 以上
- ・ ステータスリミット：各項目ボーナス 15（+増強増分 2）まで
- ・ レベル：13～14

#### 制限事項

- ・ 放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・ バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・ 戦利品判定は振る

#### その他注意事項

- ・ レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・ 成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

### 導入

君達は、シンファクシ家の屋敷にいる。

リリアーナが、クリストフを見て眉をひそめている。何があったのだろうか？

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「長年カルゾラルで戦ってきた、私の中の勘が、クリストフさんを『うさんくさい』と感じ取っているんです…」

何とも判別がつかないことをいったので、クリストフに声をかけるとしよう。

(※GMメモ：RP待機)

## 雲上の衛士団

君達は、クリストフに声をかけた。

クリストフ

「ククク…噂の英雄が、暫く私の相棒というわけですか。悪くない…。問題解決の糸口になりそうです。おっと、自己紹介がまだでしたね。私はクリストフ。既に、シンファクシ家から独立することが決まっている、シンファクシ家の次男です。

まあ、独立したら『白河愁』と名乗るつもりですよ。クリストフを『幼名』としてね。試しに造った魔動機である『グランゾン』の功績で、私は独立を認められたというわけです。最も、厳密にはグランゾンに用いた『人型機動兵器の設計に伴い用いるべき素材の選定技術』ですがね」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「それはそうとして、問題を解決しなければならないものがあるんです。興味がなく、長らく放置していたのですが…、まあ、あなた方に頼ることになりそうです。私も、一回の巴術士なのですが、アレを私ひとりの技術で解決出来る気はしないのでね」

そう言って、クリストフは君達に協力を仰ぐだろう。

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「私に与えられた任務は、『赫界雲海』に出張っている『城薙家』の支援です。最近落ち目の家ではありますが…まあ、グランゾン建造にあたって世話になった家ですのでね。

それでは、早速ではありますが、雲海の『薙環陣地』に行きましょうか。

『トウゴ・ランディング』の『搭乗窓口』に声をかければ、すぐに向かうことができますよ」

そう言って、クリストフは屋敷を出るだろう。

(※GMメモ：RP待機)

### トウゴ・ランディング

君達は、トウゴ・ランディングで搭乗窓口の男に話しかけた。

そこで、リリアーナとクリストフが言い合いになっていた。

### クリストフ

「あなたは魔動天使なんですから、普通に飛んでいけばいいんじゃないですか？」

### リリアーナ

「そんな長時間飛んでたら普通に翼が焼けますよ！さ、流石に、人類の叡智たる飛空艇には負けますからね！？」

(※GMメモ：RP待機)

…とはいえ、リリアーナが裁量よく搭乗手続きを済ませておいたようだ。

### 搭乗窓口の男

「お話は伺っております。『赫界雲海』までの飛空便をご利用なさいますか？」

(※GMメモ：RP待機)

…飛空艇に乗り、数十分。

君達は、『赫界雲海』に辿り着いた。

### 赫界雲海（かっかいうんかい）

軍需企業、アーキバスの博識な天才機工士、スネイルがもたらした飛空艇技術は、人々を空へと誘った。

仰ぎ見ることすら難しかった、雲海の『浮島』にさえ、今やヴァルマーレの衛士たちが降り立ち、活動している。

天より邪竜の眷族の動きを見張るための監視所が、赫界雲海に築かれつつあったのである。

君達は、薙環陣地のクリストフに話しかけた。

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「やはり、雲海の空気は冷えますね。ヴァルマーレも、冬になれば雪が積もるほど寒いとはいえ、ここの寒さは独特ですね。

さて、『薙環陣地』の指揮官に会いに行きませんか。名前は『桜』というそうです。無礼のないようにお願いしますね」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、彼は薙環陣地の奥へと進んでいった。

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「……………」

…リリアーナがむくれている。

リリアーナ

「……………」

間違いなく、リリアーナが思いっきりむくれている。クリストフのような人物は嫌いな人物なのだろう、明らかに嫌そうな顔をしていた。

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「…彼から、邪神の気配を感じるんです。これを、我が主に伝えたらどうなるのやら…」

と言って、リリアーナはそれ以上のことを追及しようとししない。というか、確証ではないのだろう、言ったところでそれが正しいのかについて確信を持って言えないと言える。

(※GMメモ：RP待機)

ともあれ、君達は話しながら、『薙環陣地』に向かおうとする。  
そこに、魔物が立ちはだかった。翼を持った猫、というべき外見の、小さな存在だ。

翼持つ猫

「シャーッ！！」

敵：ゲイラキャット×4

君達はゲイラキャットをしばいた。

(※GMメモ：RP待機)

そのまま道なりに進み、桜と呼ばれた紫髪の女性のところに辿り着くだろう。

桜

「よく来てくださいました、暗魂の冒険者様がた。私は城薙桜。当地の部隊を指揮するものです。お初にお目にかかります。今回の助力の申し出に感謝します！」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「最近はどうです、桜？グランゾンで用いた『部材の選定技術』を利用して、対竜兵器の生産などはできていますか？」

桜

「…あ、いたんですか、シラカワ博士。今取り込み中なので黙っていてくれませんか？」

リリアーナが笑った。その直後にクリストフにリリアーナが殴り飛ばされた。  
痛そうだ。

(※GMメモ：RP待機)

桜

「さて、話を続けますよ。ここ『薙環陣地』は、雲海に浮かぶ浮島を利用し、帝都に近く邪竜の眷族を見張るために築かれた拠点です。そして、有事の際には、等護沖合の軌道エレベーターから対竜兵装を積んだ航空兵器で上空から竜共を叩く！それが、この拠点の存在意義です。

計画にあった『プロテクトール号』は、開発に当たってコストが嵩んでしまい、事業仕分けでお蔵入り。その上、原住民の『バヌバヌ族』との小競り合いが絶えないんです。それ故に、いろいろと手を貸してもらいたい状況なんですよね」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「私ができることはありますか？」

桜

「あなたは黙っていてください。冒険者殿。お分かりとは思いますが、あなた達だけが頼りです。どうか、よろしくお願いいたします」

…グランゾンという超兵器を造る腕前はあるのに、この始末である。げんこつを喰らっても尚、リリアーナは『この事実』ゆえに嘲笑をやめられなかったようだ…。

## 困ったヤツのあしらい方

仕事に取りかかる前に、桜が声をかけてきた。

(※GMメモ：RP待機)

桜

「早速、ひと仕事頼みたいところではあるのですが、その前に、シラカワ博士をどうにかしておかなければならないんです。エイドリアン様に、奴をこき使ってくれとは頼まれたものの、この地は、まだまだ未開部分も多いんです。

ヘタに任務に出すと、何をやらすか分からないので。

アウェア嬢の従者である、リリアーナと相談して欲しいのだけれど、どうですか？」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、桜は用件を君達に託した。

(※GMメモ：RP待機)

君達は、リリアーナに話しかけた。

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「…クリストフを見張ってる？桜さんそんなこと言ってたの？まあいいけどさ、見張れと言われる段階でよっぽどしでかしてると言えるよ…？」

そう言って、リリアーナはクリストフに話しかける。

クリストフ

「なんですか。私の任務が決まったのですか？」

リリアーナ

「炊き出し、手伝って」

…まさかの強制連行である。

君達は、思わぬ展開に腹筋が痛くなってくるだろう。

…精神抵抗力判定の時間が、来てしまったようだ。

**精神抵抗力判定（腹筋崩壊抵抗判定） 目標値：25**

失敗時は「威力 100+30/C 値 7」の HP に対する確定ダメージ（最低 1 残す）。

腹筋に来すぎて笑い転げてしまい、次の戦闘終了時までの間、行動判定に-1 のペナルティを負う。ファンブルをした場合、その PC はいつの間にかベニテングタケとワライタケを食べていたことになる。強制連行されたクリストフの横顔が城之内（要するに AGO）に見えてしまい、行動判定へのペナルティが倍になる。

一部の者は腹筋が吹っ飛んでしまっているだろう。

…それはさておき、君達は桜に話しかけることになる。

桜

「面倒な役割を押しつけて申し訳ないですが、助かりました。我ら城薙家とシンファクシ家は、古くからの盟友…。あのようなやりたいことしかできない病の男でも、切って捨てることはできないんです。

しかし、聞き耳を立てていたのですが、あなた達…というよりは、リリアーナはクリストフのあしらい方が上手いですね。なんなのでしょう？」

## PC への選択肢

- ・ 黙秘する
- ・ カルゾラルの魔動天使であることを話す

(※GM メモ：「カルゾラルの魔動天使であることを話す」ここから)

桜

「カルゾラルの魔動天使い！？そんな有名人をこき使うアウェア嬢って一体…」

(※GM メモ：「カルゾラルの魔動天使であることを話す」ここまで)

桜

「…こほん。きっと方々で、面倒くさい連中の相手をしてきたのでしょうね。なんとなくですが、わかりますよ」

(※GM メモ：RP 待機)

そう言って、君達は本題…すなわち、仕事を始めることになるだろう。

## 監視の目が捉えるもの

対するはバヌバヌ族

桜が話し始める。

桜

「さて、ここからが本番だ。まずはあなた達に、我々の敵を知ってもらおうと思います。



そう、先ほども話題に出した原住民の『バヌバヌ族』です。

数年前、この地にやってきて、彼らと出会った我々は、彼らに贈り物を渡し、ここに監視所を設ける許可を得ました。それから半年ほどの間は、友好的な関係を維持していたのですが…彼らは突然に、態度を一変させたんです。

今や人と見ると無差別に襲ってくる有様で、必要物資の調達でさえ大変なんです」

(※GMメモ：RP待機)

桜

「そこであなた達には、『バヌバヌ族』対策を進めている、『カリスト』に手を貸してあげて下さい。頼みましたよ…」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、『薙環陣地』の監視塔にいるカリストに声をかけた。

カリスト

「冒険者殿ですね？桜隊長から連絡は受けております。私達の任務は、この拠点に接近するバヌバヌ族を警戒し、追い払うことです。

バヌバヌ族というのは、この浮島の原住民でして、『太っちょの鳥』とでも言いましょうか、そんな姿をしています。地図に書き記した地点を巡回して、もし、バヌバヌ族が顕れたら撃退してください。見た目に反して素早い相手ですから、油断しないでください」

**探索判定 目標値：27**

**失敗時、敵側先制。**

**敵は1箇所目と3箇所目に出現する。**

**敵：グンド部族のバヌバヌ族×2**

君達は、バヌバヌ族の襲撃者を倒した。

薙環陣地のカリストに報告しよう。

(※GMメモ：RP待機)

帰還すると、心配そうにカリストが声をかけてきた。

(※GMメモ：RP待機)

カリスト

「…なるほど、これは少し警戒を強めないといけないようですね。でも、その様子では後は取らなかったようで。心強い助っ人が来てくれて、本当に良かったです」

**カリストの憂鬱**

続けて、カリストが話し始める。

カリスト

「ところで、冒険者殿も、気付いているのではありませんか？私達の部隊の士気が低いことに…。ここ雑環陣地は、僻地中の僻地です。これまで一度も、邪竜の眷族が現れたことはありませんから、武勲の立てようもない…ということです。

まあ、帝都に近いおかげで、警報を鳴らすことは簡単ですが」

(※GMメモ：RP待機)

カリスト

「つまり、ここは『左遷の地』なのです。宮内庁からは、戦果を期待されていませんし、出世の望みもないとあって、士気は下がる一方…」

そう話していると、やけに旨そうな肉の焼ける匂いがした。

カリスト

「これは…？」

**PC への選択肢**

- ・腹が減っては、戦はできぬ
- ・兵糧がないのも辛いよねと思って

…その日、どういうわけか宴のようななにかが開かれた。

リリアーナ。一体どこからそんな高級な肉を…。

え？ポケットマネーから出した？そっかぁ…。

あしらえぬ恐怖

宴のような何かの後、桜が君達に声をかけてきた。

桜

「『腹が減っては、戦はできぬ』。言い得てますね、本当に。食糧管理をするあまり、兵に口々に兵糧が行き渡ってなかったのは盲点でしたよ」

そこに、クリストフが訪れる。

クリストフ

「武勲ではないとはいえ、こうして裏方を務めるのも私らしくない。…私にできることはありますか？」

(※GMメモ：RP待機)

桜が、盛大にため息をついた。

桜

「仕方ないですね。ここは浮島、地下を掘っても水なんぞ出るはずありません。

あなた達には、『湧水のクリスタル』を取ってきてもらいたいです。北東の、『雲樹の源泉』に向かって、これを採取してきてもらいたいです。バヌバヌ族の支配地域に近い場所なので、気を付けて下さいね」

そう言って、彼女は仕事に戻る。

(※GMメモ：RP待機)

隣の浮島に、『雲樹の源泉』はあるようだ。

(※GMメモ：RP待機)

君達は、滞りなく『雲樹の源泉』に辿り着いた。

クリストフ

「ここが、『雲樹の源泉』ですか。なるほど、水源がありますね。しかし、バヌバヌ族の支配地域に近いですから、活動する場所には気を付けたほうがいいかもしれませんね…」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「そうですね、ここは団体行動としましょう。無闇に競争をする必要はないのです」

そう言って、君達は『雲樹の源泉』を探索することになる。

**探索判定 目標値：27/29（傷なし）/31（特大）**

**この判定は、何度でもやり直せる。**

君達は、『湧水のクリスタル』を手に入れた。

リリアーナ

「『湧水のクリスタル』は見つかりましたか？」

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「うわっ、すごい水が出てくる！？」

なるほど、空気中の水分を水に変換しているんですね…」

そのとき、咆哮が響き渡る。

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「何が…！？」

雲海の底から、白い鯨のような存在が現れた。

それは、君達に敵意を向けていたが、ただ漂っているだけのようだ。

(※GMメモ：RP待機)

魔物知識判定 目標値：31

成功時、それが「雲神フヴィートヴァル」であることが分かる。蛭神だ！

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「なっ…、雲神…だと…？新たなる蛭神だということのか！？」

君達は、どうにか脱出を試みる。しかし、バヌバヌ族も迫り、崖際に追い詰められる。

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「くっ…。団体行動でもこれですか…！」

(※GMメモ：RP待機)

団体行動でも、という言い方に、君達はつかかりを感じるだろう。

それを追及すると、クリストフは言った。曰く、「どこかの世界の誰かの記憶が、幼少の頃からある」のだと。

窮地に陥った一行の元に、プトレマイオスが接近する。

トーレス

「まったく、何がどうなってやがるんだ！？ええい、突っ込むぞ！総員、衝撃に備え！」

浮島に体当たりするように、プトレマイオスを近づけるトーレス。

トーレス

『急げ！離脱する！』

君達は、それに応じてプトレマイオスに飛び乗るだろう。

遅れて、クリストフが飛び乗る。

(※GMメモ：RP待機)

君達を含め、全員を収容し終えたプトレマイオスは、目の前の巨大な存在を捉える。回避機動を取りつつ、トランザムも起動して急速離脱を行ったプトレマイオスは、見事に敵性体からの被弾を回避した。

トーレス

「リリアーナから出現の報を知らされてから、大急ぎで飛ばしてきたとは言え…危なかったな…」

(※GMメモ：RP待機)

トーレス

「ふざっけんな、この艦は蛮神用じゃないんだ、砲撃してもダメージは入らんぞ!？」

(※GMメモ：RP待機)

艦砲ついてんじゃーん、とチョケた君達だったが、艦長に物の見事にキレられるのだった。

## クリストフの見解

君達は、腕を組んで悩んでいるクリストフに話しかけた。

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「参りましたね、これは。流石の私でも、死ぬかと思いましたよ。

しかし、あのまま監視任務だけをしていたのならば、恐らくきっと、見つからなかった脅威です。こればかりは手柄と言っても過言ではないでしょう。…桜にします。あなた方はゆっくりして頂いても構いませんよ」

そう言って、クリストフは足早に桜の元へ行った。

(※GMメモ：RP待機)

…数分後、桜の罵声が聞こえてきた。

桜

「フヴィートヴァルですって！？フヴィートヴァルと言えば、この雲海を遊弋すると伝わる『伝説の白鯨』ですよ！？それを、バヌバヌ族が蛮神として呼び降ろしたのですか！？いいですか、それは問題を現出させたということですよ！？」

…君達の背後に、すごく冷たいものが流れた気がした。

(※GMメモ：RP待機)

あ、この人怒らせたらマズい。君達の勘はそう告げていたのだった。

## 報酬

### 基本要素

- ・経験点：7500点
- ・資金：15000G
- ・名誉点：なし
- ・成長回数：9回

### マジテックトームストーン

- ・戦記：500個
- ・詩学：300個